
美的反省について

一川端文学に於ける鏡の世界からみて

グエン・ルン・ハイ・コイ

発表要旨

発表の目的

本発表の目的は仏教に属している川端文学に於ける「鏡」の世界の性格を明らかにして、その「鏡」の世界の中にあられる「美的反省」という精神的現象の本質について論じることである。ここで、明白にしなければならないのは「鏡の世界」や「美的反省」の二つの問題とそれらの関係である。

本発表で、「美的反省」は美的判断に於ける反省であると定義される。「美的判断」とは、美的対象の比例や調和や美的質などに対しての主体の判断である。そして、「反省」とは自己意識であり、「自我とは何か」という問いを発することである。本発表は、「美的判断」と「反省」の二つを結び、考察する。すなわち、美的判断の中に自己意識はどのようにあらわれるかについて探究し、この精神的現象の客観的実在性を明確にする。

研究上の位置づけ

川端文学の研究史の上で、その文学の中に「鏡の世界」があると指摘されている。本発表は、その「鏡の世界」の構造を明確にし、その文学では鏡ではない物も「鏡」として表現されている「鏡の美学」について分析する。更に、禅の思想にあらわれている「鏡」という象徴について論じ、川端文学の基底に禅の思想が流れ、その文学の「鏡的世界」の起源は禅の思想であることを明らかにする。そして、その「鏡的世界」の中に、「美的反省」はどのようにあらわれているかについて論じ、この精神的現象の客観的実在性を明らかにする。

新知見

本発表は次の新知見を明らかにする。まず、川端文学における「鏡の世界」の構造は、「鏡」

と「映るもの」と「かげ」（鏡像）の三つの要素が含まれている。「鏡」は「面」がある。「面」がなければ、反映することができなく、「鏡」になれないが、川端文学では、「面」のないものでも「鏡」になれ、どんなものも「鏡」になれる。「映るもの」は「鏡」の前に立って「鏡」の面のうえで映され、その面に「かげ」を作るものである。「かげ」は「鏡」の性格として「反映」によって造られ、鏡の面にある「映るもの」のイメージである。この「鏡の世界」の各要素間の関係は次である。「映るもの」はそのものの「鏡」に反映される「かげ」に基づいて明らかに認識され、「映るもの」と「かげ」の関係は認識関係である。そして、「映るもの」と「鏡」と「かげ」の関係は相互に転換されて、統一される関係である。これは川端文学の真髄である。更に、川端文学において「鏡の美学」は対象について表現し方に見える。藝術的对象は直接に表現されず、「鏡」の世界に属している他のものを映す「鏡」や鏡に映るものや何かの物の「かげ」として表現されている。この鏡の世界の表現し方は仏教の「主客一如」や「不二法門」の思想に基づくことである。その上、その鏡的世界の中に美的反省は三種類がある。第一、美的主体は、「かげ」として自分の「反価値」について自意識する。これは『千羽鶴』のなかに見える。第二、美的主体は、「映るもの」として自分の「価値」や「反価値」について自意識する。これは『水月』や『山の音』や『眠れる美女』などに見える。第三、美的主体は、「映るもの」として自分の「反価値」について自意識し、「全体」として「鏡」との同一化し、「主客一如」の世界に達しようとする。これは自分に対する「美的反省」より「自分を創造しようとすること」であろう。これは『湖』のなかに見える。

本発表は禅に属している川端文学に於ける「鏡」的世界に基づいて美的反省について論じるが、美的反省はその文学の「鏡の世界」だけに属することではなく、普遍性を持つと思われる。更に、この点を発展させれば、「美的反省」と関わる「美的教育」や「自我」などの問題をもっとも明らかにする為の有効な一つの鍵になると思われよう。

（日本大学）